

ダニエルの書 - 第百八号

預言的象徴の解明：黙示録における七つのラッパの総合的分析

Jeff Pippenger

2024-02-29

ウィリアム・ミラーは、『ヨハネの黙示録』にある七つの教会、七つの封印、七つのラッパについて大いなる光を与えられた。彼はそれらの預言的象徴を、まず異教、その後に教皇権という、荒廃をもたらす二つの勢力の枠組みの中に位置づけた。彼はそれらの象徴の預言的特徴をすべて見たわけではなかったが、彼が見たものは、使徒時代から世の終わりに至るまでの神の教会の内的歴史と外的歴史に関する基礎的理解を打ち立てた。内的歴史は教会によって表され、教会の外的歴史は封印によって表された。彼は、ラッパがローマに対する神の裁きの象徴であり、それが世の終わりににおけるローマに対する神の裁きの型であることを見ていたが、世の終わりのローマが三者連合から成っていることは見ていなかった。

ウライア・スミスによる『Daniel and Revelation』という書籍は、いくつかの誤った考えを含んでいるが、ホワイト姉妹はそれを「神の助けの手」と評した。彼女は、それが『The Great Controversy』『Patriarchs and Prophets』『The Desire of Ages』と共に広く配布されるべきだとも示した。彼女の強い推薦は、その書が彼女自身の著作と同じ靈感の水準にあることを意味するのではなく、その書には「偉大な教え」が含まれており、「多くの尊い魂を真理の知識へと導いてきた」ということを意味していた。

本書はミラー派の預言的論理を用い、1844年10月22日以前には見られなかった預言に関する概念を伴っている。私たちは、三つのわざわいの三重の適用を提示するにあたり、本書の該当箇所と言及する。

ミラーは、「七つのラッパは、地上、すなわちローマ王国に下された特異で重大な七つの裁きの歴史である」と述べた。最初の四つのラッパは異教ローマに下された裁きを表し、第五と第六のラッパは教皇ローマに下された神の裁きであったが、ミラーは第七のラッパが現代ローマに対する神の裁きを表していることは認識していなかった。黙示録の七つの封印と七つのラッパについて、ユライア・スミスは次のように記した：

「小羊はその巻物を受け取るやいなや、直ちに封印を開き始め、使徒の注意はそれぞれの封印の下で起こる光景へと向けられる。聖書において七という数が完結と完全を表すことはすでに指摘した。したがって、七つの封印はある種の出来事の全体を包含し、おそらくはコンスタンティヌスの時代まで及び、そして七つのラッパはその時以降の別の系列である、という見解は正しくない。ラッパは、封印の出来事と同時代的に起こるが、性質がまったく異なる一連の出来事を示す。ラッパは戦いの象徴である。ゆえにラッパは、福音時代に諸国民の間で起こる大きな政治的激動を示す。封印は宗教的性格の出来事を示し、キリスト教時代の開幕からキリストの来臨に至るまでの教会の歴史を含んでいる。」ユライア・スミス『ダニエルと黙示録』431頁。

ラッパは戦争と政治的混乱の象徴である。ヨハネの黙示録8章2節について、スミスは次のように述べている：

第2節 そして、私は神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らには七つのラッパが与えられた。

「この節は、新しく明確に区別された一連の出来事を導入している。封印においては、いわゆる福音時代における教会の歴史が扱われてきた。今ここで導入される七つのラッパにおいては、同じ時期に起こるはずの主要な政治的・戦争的出来事が示されている。」ユライア・スミス『ダニエルと黙示録』476頁。

黙示録第8章の最初の六節で第七の封印が開かれ、その開封を背景に、七つのラッパを持つ七人の天使が吹き鳴らす準備をする。

彼が第七の封印を開いたとき、天にはおよそ半時間の静けさがあった。私は、神の御前に立つ七人の天使を見た。彼らには七つのラッパが与えられた。また、別の天使が黄金の香炉を持って祭壇の前に来て立った。彼には多くの香が与えられ、それを、御座の前にある金の祭壇の上で、すべての聖徒たちの祈りと共にささげるためであった。聖徒たちの祈りと共に立ちのぼる香の煙は、天使の手から神の御前に上っていった。天使は香炉を取り、祭壇の火でそれを満たして地に投げつけた。すると、声と雷鳴と稲妻と地震が起こった。そして、七つのラッパを持つ七人の天使は、吹き鳴らす用意をした。黙示録 8:1-6。

私たちは以前の記事で指摘してきたが、その特有の預言的現象そのものをまだ具体的に取り上げてはいない一つの預言上の特異性がある。その特異性とは、預言の歴史における一連の道標を表す象徴が、それらが指し示す歴史の終結において一つに結集するということである。私たちは、エゼキエル書8章の四つの忌むべきことによって表されているラオデキヤ的アドベンチズムの四世代が特定の道標を画していること、しかしそれぞれが試練として、十四万四千人の封印の歴史の中で繰り返されることを示してきた。この特異性は七つのラッパにも見られる。というのは、それらは異教ローマ、教皇ローマ、そして現代ローマに対する特定の裁きを表しているが、間もなく来る日曜法において現代ローマへの執行審判が始まる時、それらは再び一つに結集するからである。

七つのラッパには過去に成就した時期が特定されているが、ホワイト夫人は、間もなく到来する日曜法の歴史において、黙示録第八章の七つのラッパを持つ七人の天使も位置づけている。

「そして、彼が第五の封印を開いたとき、私は、神の言葉のゆえに、また彼らの持っていた証しのゆえに殺された人々の魂が、祭壇の下にあるのを見た。彼らは大声で叫んで言った、『聖にして真実なる主よ、いつまでですか。地に住む者たちに対して私たちの血の裁きを行い、復讐してくださらないのは。』また、白い衣が彼ら一人ひとりに与えられ〔彼らは清く聖なる者と宣言された〕、なおしばらくの間休むようにと言い渡された。彼らの仲間のしもべたちや兄弟たちで、自分たちと同じように殺されることになっている者たちの数が満ちるまで。」〔黙示録 6:9-11〕ここでヨハネに示された光景は現実そのものではなく、将来のある時期に起こるであろう事柄であった

「『ヨハネの黙示録』8章1～4節を引用。」『Manuscript Releases』第20巻、197頁。

前の箇所ではホワイト夫人は、第五の封印の対話とその成就を、第八章で七人の天使がラッパを吹こうとしている時期に適用しているが、同じ表象を黙示録第十八章の二つの声の歴史にも適用している。

「第五の封印が開かれたとき、黙示を受けたヨハネは、幻のうちに、神の言葉とイエス・キリストの証しのために殺された人々が祭壇の下にいるのを見た。これに続いて、忠実で真実な者たちがバビロンから出て来るよう召し出される、黙示録第18章に記された光景が現れた。[黙示録18章1-5節、引用]」『Manuscript Releases』第20巻、14頁。

七つのラッパは、異教ローマ、教皇ローマ、そして現代ローマの歴史における神の裁きを表しているが、2001年9月11日の歴史や、間もなく来る日曜法の第二の声においても表されている。黙示録第8章の最初の六節を論じた後、Uriah Smithは最初の四つのラッパの歴史的成就を提示し始める。

七つのラッパの主題がここで再開され、この章の残りとも第9章全体を占める。七人の天使が吹き鳴らす備えをする。彼らの吹き鳴らしは、ダニエル書2章と7章の預言を補完するものであり、古代ローマ帝国が十の部分に分裂することから始まる。このことについては、最初の四つのラッパに記述がある。ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』477頁。

スミスは、最初の四つのラッパは異教ローマに対する神の裁きであったと指摘する。彼は、第一のラッパの預言的特徴を示す第7節を引用し、そしてその歴史的成就を特定する。

没落の途上にあった西ローマに最初に下った厳しく重い裁きは、後の侵入の道を開いたアラリック率いるゴート族との戦争であった。ローマ皇帝テオドシウスは395年1月に死去し、冬の終わりまでにアラリック率いるゴート族は帝国に対して武装していた。

アラリックによる最初の侵攻は、トラキア、マケドニア、アッティカ、そしてペロポネソス半島を蹂躪したが、ローマ市には達しなかった。しかし二度目の侵攻では、そのゴート族の族長はアルプス山脈とアペニン山脈を越え、「永遠の都」の城壁の前に姿を現し、都市はまもなく蛮族の猛威の餌食となった。

「第一のラッパの吹鳴の時期は、四世紀末ごろから以後であり、ゴート族によるローマ帝国に対するこれらの荒廃をもたらした侵攻を指している。」ユライア・スミス『ダニエルと黙示録』478ページ。

スミスは、アラリックを、第一のラッパで象徴される異教ローマに対する神の裁きの象徴として特定している。ラッパのそれぞれにはそれを象徴する歴史上の人物が割り当てられており、アラリックは4世紀末に始まる第一のラッパの到来を表している。ミラーは日曜遵守者であったため、このラッパが日曜遵守の強制によってローマにもたらされたとは見抜けなかった。スミスもこの点を見落としていたが、321年にコンスタンティヌスが最初の強制的な日曜法を制定したことは認めていた。日曜遵守の強制に関して適用される預言的な法則はいつも同じである。神は変わることがないからだ。その法則とは、「国家

的背教の後には国家的破滅が続く」というものである。アラリックは、コンスタンティヌスが最初の日曜法を可決したまさにその時期に始まった国家的破滅の始まりを象徴している。

スミスは、第二のラッパを示す第8節を引用して話を進め、次のように解説を続ける：

コンスタンティヌスの後、ローマ帝国は三つに分割された。したがって、しばしば見られる「人の三分の一」などという言い回しは、災いの鞭の下にあった帝国の三分の一への言及である。このローマ帝国の分割はコンスタンティヌスの死に際し、その三人の息子、コンスタンティウス、コンスタンティヌス2世、コンスタンスの間で行われた。コンスタンティウスは東方を領し、帝国の首都であるコンスタンティノープルに居を定めた。コンスタンティヌス2世はブリタニア、ガリア、スペインを治め、コンスタンスはイリュリウム、アフリカ、イタリアを治めた。（サバイン『教会史』155頁参照。）この周知の史実について、アルバート・バーンズが『黙示録12章4節』の注解で引用するところによれば、エリオットは次のように述べている。「ローマ帝国が東西二つの部分に恒久的に分割される以前に、少なくとも二度、帝国は三分割された。最初は西暦311年、コンスタンティヌス、リキニウス、マクシミヌスの間に分けられた時であり、もう一度は西暦337年、コンスタンティヌスの死に際し、コンスタンスとコンスタンティウスの間で行われた。」

ユライア・スミス『ダニエルと黙示録』480頁。

スミスが引用する歴史家たちが言及する、ローマが三つに分割されたという歴史的現象、また二つに分割されたという現象は、近代ローマの三者連合を示すローマの要素であり、その三者連合は政教一致を表す二つに分かれた構造を形作っている。スミスは続けて、第二のラッパに関連する歴史的人物を特定する。

第二のラッパの吹鳴を例証する歴史は、明らかに、恐るべきゲンセリックによるアフリカへの侵入と征服、そしてその後のイタリア征服に関係している。彼の征服は大部分が海上におけるものであり、彼の勝利は「あたかも火に燃える大いなる山が海に投げ込まれた」かのようであった。艦隊同士の激突や、沿岸部における戦争の広範な惨禍を、これ以上に、いやこれほどまでに適切に描き出す比喩がほかにあるだろうか。このラッパを解釈するにあたり、私たちは商業界に特別な影響を及ぼすいくつかの出来事を探すべきである。用いられている象徴は、当然のことながら、動揺と騒乱を探し求める方向へと私たちを導く。激しい海上戦以外の何ものも、この予言を成就することはないだろう。もし最初の四つのラッパの吹鳴がローマ帝国の没落に寄与した四つの顕著な出来事に関係しており、第一のラッパがアラリック率いるゴート族による蹂躞を指すのだとすれば、このラッパにおいては、ローマの権勢を揺るがし、その崩壊を促した次なる侵略行為を当然探し求めることになる。次の大侵略は、ヴァンダル族を率いた「恐るべきゲンセリック」のものであった。彼の活動期は西暦428年から468年に及んだ。この偉大なヴァンダルの首領はアフリカに本拠を置いていた...

ローマの没落においてこの大胆な海賊が果たした重要な役割について、ギボン氏は次のような意味深い言葉を用いている。「ゲンセリック、ローマ帝国の破壊において、アラリックとアッティラの名と同等の地位に値する名である。」ユライア・スミス『ダニエルと黙示録』481, 484。

スミスは、最初の三つのラッパの歴史的象徴を指摘した歴史家ギボンを引用しながら、ゲンセリックが第二のラッパであると比定し、さらにゲンセリックは「アラリックやアッティラと同等の地位に値する」と述べた。アラリックが第一のラッパ、ゲンセリックが第二、フン族のアッティラが第三のラッパであり、これは第10節で扱われる。スミスは、ゲンセリックにより表される第二のラッパは「428-468」の歴史を表すと指摘した。続いてスミスは第三のラッパを示す第10節を引用し、叙述を続ける：

この一節の解釈と適用において、私たちはローマ帝国の覆滅をもたらした第三の重要な出来事へと導かれる。そしてこの第三のラッパの歴史的成就を見いだすにあたり、いくつかの引用についてアルバート・バーンズ博士の『Notes』に負うところがある。この聖句を説明するに際しては、この注解者が言うように、「燃えさかる流星にたとえられうるある首長または戦士がいなければならない。その行路は並外れて輝かしく、まさに燃える星のように突如として現れ、そして水にその光を消された星のように消え去るであろう」。-『黙示録8章注解』

ここでは、このラッパは、アッティラがフン族の大群を率いてローマの権力に対して繰り広げた、荒廃をもたらす戦争と激しい侵攻を暗示していると前提されている。…

「そして、その星の名はワームウッドと呼ばれる [苦い帰結を示す]。」この言葉は—我々の訳文の句読点からしても明らかかなように—直前の節といっそう緊密に結びついており、しばし私たちにアッティラの性格、彼が作り出すか、あるいは手段となって引き起こした惨禍、そしてその名が呼び起こした恐怖を思い起こさせる。

「『完全な根絶と抹消』は、彼がもたらした惨禍を最もよく言い表す語句である。彼は自らを『神の鞭』と称した。」Uriah Smith, Daniel and Revelation, 484, 487.

第三のラッパの歴史は、フン族のアッティラによって象徴され、441年から彼の死去した453年までであった。スミスは次に第十二節を引用し、そこでは第四のラッパが提示され、蛮族の君主オドアケルが描かれており、西ローマの三重の象徴が太陽・月・星で表されている。彼はこの三つの象徴を次のように同定している。「太陽、月、星——ここでは疑いなく象徴として用いられている——は、明らかにローマ政府の大いなる光体、すなわちその皇帝、元老院議員、執政官を示す。ニュートン主教は、西ローマの最後の皇帝はロムルスで、嘲ってアウグストゥルス、すなわち『小アウグストゥス』と呼ばれたと述べている。西ローマは西暦476年に滅亡した。それでもなお、ローマの太陽は消えたが、元老院と執政官が存続するあいだは、その従属する光体はかすかに輝き続けた。しかし、度重なる内乱と政運の変転を経て、ついに西暦566年、古代政府の全体の体制は覆され、世界の女帝であったローマそのものが、ラヴェンナの総督に朝貢する貧しい公爵領へと貶められた。」ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』487頁。

ここで私たちは、近代ローマの三重の結合を予示するローマの三分割についての別の証拠を見いだす。東ローマと皇帝コンスタンティヌスの場合には、その三分割は彼の三人の息子によって表されたが、西ローマではそれは三重の統治形態によって表された。スミスはさらに、太陽、月、そして星が、西ローマが打ち倒された順序を表していると指摘する。彼は叙述を、最後の三つのラッパの次の導入で締めくくる。

これらの蛮族の最初の侵入によって帝国にもたらされた災厄は恐るべきものであったが、後に続く災厄に比べれば比較的軽微であった。それらは、やがてローマ世界に降りかかる豪雨に先立つ、にわか雨の最初の滴にすぎなかった。残る三つのラッパは、以下の節に示されているとおりに、災いの雲に覆われている。

「第13節.そして私は見た.また、天の中空を飛ぶ一人の天使が大声でこう言うのを聞いた.『地に住む者たちに、災いだ、災いだ、災いだ.これから吹き鳴らす三人の天使のラッパのほかの響きのゆえに.』」

この天使は、七つのラッパを吹く天使たちの系列の一員ではなく、残る三つのラッパが、それらが吹き鳴らされるときに起こるいっそう恐るべき出来事のゆえに災いのラッパであることを告げ知らせる者にすぎない。したがって、次の、すなわち第五のラッパは第一の災い、第六のラッパは第二の災い、そして第七のラッパ、すなわちこの七つのラッパの系列の最後のものは第三の災いである。ユライア・スミス『ダニエルと黙示録』493頁。

次の記事では、引き続きラッパの三つの災いを取り上げます。

帝政ローマの没落における災厄は、その最後の一つに至るまで語られ、ついにはローマは皇帝も執政官も元老院も持たぬ都市となった。『ラヴェンナ総督のもとで、ローマは第二の地位に落とされた。』太陽の三分の一が打たれ、月の三分の一が、そして星の三分の一が打たれた。カエサルの血統は、西方皇帝の滅亡とともに絶えたわけではなかった。ローマはその陥落以前には帝権の一部しか有しておらず、コンスタンティノーブルがそれとともに世界帝国を二分していた。そして、なお帝都たるその都市を、ゴート族もヴァンダル族も支配することはなかった。コンスタンティヌスによる最初の帝都移転の後、その皇帝は、しばしばローマの皇帝を自らの指名による代理統治者として据えた。コンスタンティノーブルの運命は別の時代に残され、別のラッパによって告げられた。太陽も月も星も、その三分の一が打たれたにすぎなかった。

第四のラッパの結びの言葉は、西方帝国の将来の復興を示唆している。「その三分の一において、昼は輝かず、夜もまた同様であった。」世俗権の点では、ローマはラヴェンナに従属し、イタリアは東ローマ帝国の征服された属州となった。だが、これはむしろ他の預言に属する事柄であるが、聖像崇拜の擁護が、初めて教皇と皇帝の霊的権威と世俗権力を激しく衝突させた。そして、ユスティニアヌスは、教会に対するすべての権威を教皇に付与することによって、のちに君主を立てる権能をも帯びるに至る教皇至上権の伸張に手を貸した。「西暦800年に、教皇はカール大帝に『ローマ人の皇帝』の称号を授けた。」-キース。その称号は再びフランス王からドイツ王へと移された。そして、この虚構さえも、皇帝フランツ2世によって、1806年8月6日に最終的かつ永遠に放棄された。A・T・ジョーンズ『今日の大国』54頁。